

2018年度国内研修報告書

研修テーマ

住宅型老人ホーム利用者の暮らしの安全と自由について

研修先

鹿児島県始良市

住宅型有料老人ホーム エスプリ鹿児島あいら

研修時期

2018年8月1日～8月8日

私が今回、鹿児島県始良市の住宅型老人ホームにおける研修に参加した理由は、これまでに大学で培ってきた知識を生かしながら、実際の現場を自分の目で見た上で、福祉の実学を学びたかったからである。具体的に言うと、大学での座学における学びだけではなく、直接高齢者の方々からのお話を聞いたり、老人ホームの施設としての機能の役割を知りたかったからである。

受け入れ先である施設の周囲の環境は、緑豊かで人口約7万5千人の小規模な町であり、車がないととても生活は難しいと感じられた。施設は、住宅型老人ホームとデイケアサービスの施設が併用されており、要介護1～5の方が入居出来るとのことだった。今年の三月に新規オープンした施設ということもあり、新しくとても清潔感があふれる施設であった。

最初に、ラウンジ、食堂、そして利用者の方の個室などの施設内を見学させていただいた。利用者の方はそれぞれの個室があるため、一人一人のプライバシーは保つことが出来るようだった。さらに、各部屋にはナースコールがあるため、転倒したり何か他の緊急を要した場合、すぐに対処することが出来ると思われた。食堂では、ゼリー状にして食べやすくするための粉末が置いてあり、今まで考えたことがなかったのだが、普段私たちが食べているものでも、高齢者は歯の力や嚥下障害のために、食べ物の種類によっては噛み砕くことや飲み込むことが難しく感じられることもあるということが分かった。

傾聴ボランティアで認知症の方とお話ししたのだが、認知症ゆえに以前お聞きした内容を繰り返したり、また言おうとすることを忘れてしまうといった様子もあった。その時、どのような言葉をかけたらよいのか分からなかった。ほかにもっと良い方法があるのかもしれないが、ただ相槌をうつことしか出来なかった。先程話していた人の事も少し姿が見えなくなっただけで、その人の事を忘れてしまわれていたので、認知症の方への対処方法を知ることは認知症への理解につながると思った。また、ご自分から話してくださる方もいれば、黙々と機能訓練の作業している方もいらっしゃった。交流をしようと話しかけていたのだが、集中して作業をしている方にはあまり話しかけないで、見守るかたちの方が良かったのではないかと思った。機能訓練として指先を動かすことで脳の機能を活性化させ、さらに集団で行うことは孤立を防

ぎ、QOLを高めることにつながっていくと言えらると思つた。様々な背景を持つた方が多かつたので、人生経験豊富な高齢者の方といろいろな話が出来てよかつた。

次に、受け入れ側の施設の好意で別の施設を見学させていただいたが、同じ高齢者施設でも方針や運営の仕方が異なつてゐることに驚いた。その施設では、新型のユニット形式で基本的には全部個室とのことだつた。10部屋が一つのユニットであり、その一つのユニットが一軒の家として考えられてゐるとのことだつた。実際には使用しないが、家と認識してもらうために玄関をつくつたり、建物内だが玄関から出たら、自然があるように植物が置いてあつた。無機質な空間よりもアットホームな空間であつたので、玄関や外などカテゴリーされた空間があることによつて、物事に対する認知力が続いていく効果があるのではないかと思つた。また、個室の前に表札があつたのだが、普段見かけるような身長に合わせた高さではなく、車いすの目線に合わせた高さで表札があつた。車いすに乗つてゐる高齢者の目線で考えられており、自分だけの尺度だけでなく、それぞれの尺度も考へていくことがノーマライゼーションを目指す考へ方につながっていくと思つた。そして、治療のための施設ではなく、その人が普段生活してゐるよつに生活できるよつな自由さを感じられた。二つの施設を見学させていただいて考へたことは、多岐にわたる施設において、利用者側が自分にとつて必要なケアを求められ、それに合つた施設を選ぶことが重要だと思つた。

エスプリ鹿児島あいらの施設では、私たち大学生が研修前に企画してきつたお祭りの屋台、スイカ割りや流しそうめんなどのイベントを行い、利用者の方々と交流を深めることが出来るよつ機会になつた。スイカ割りでは、利用者の方が中庭だが久しぶりに外出された方が多かつたよつで、笑顔でスイカ割りを楽しそうにしてゐたのが印象的だつた。

また、私は屋台企画の輪投げを担当しており、お祭りの日のために準備をしてきつたが、直前で変更があつたり、自分が構想してゐたものとは違つた形になつてしまつ、思つたよつに物事は進まないと思つた。しかし、利用者の方々に機能訓練の一環でもあるが、輪投げづくりのための飾りつけ等を手伝つていただいたのは非常に助かつた。私は物事を一人で進めてしまつことが多いのだが、他の方の力を借りて協力していくことは、楽しくもあり一人では決して終へることが出来ないものだつたので、貴重な経験となつた。

お祭りを振り返ると、計画段階でより構想を練り、屋台のデモンストレーションを行うべきだつたことが悔やまれる。そうすることによつて、利用者の方々やそつご家族がより楽しめることが出来るものになつてゐたのではないかと反省してゐる。この経験を今後何らかの企画をする際に活かしていきたいと思つた。

傾聴の際に、デイサービスを利用されてゐる方の一人が、デイサービスの間は外出する自由がないとおしゃつてゐたのが印象的だつた。その時期は確かに外出する機会が減つてゐたとのことで、施設側が外出する機会をより設ければ、利用者の方の外出に対する自由はある程度確保できるのではないかと思つた。

医療面では、かかりつけの医師が来られたり、歯科医師1名や歯科衛生士2名が施設に往診に来られ、携帯用の治療器を使いながら利用者の健診をするとのことだつた。また毎朝、血圧を測るなどのバイタルチェックがあり、健康管理は安心することが出来ると思つた。

施設での研修を終へて、老人ホームがどつよつな役割をしてゐるのかを学ぶことが出来た。

施設の機能と住宅的機能を併せ持つ住宅型老人ホームでは、個室によってプライバシーは保つことが出来る。その日のデイサービスを利用するかどうかは利用者の方が決定できるので、参加するかどうかの意思の自由もあると言える。夜 19 時には施設の玄関が施錠されるが、認知症の高齢者が徘徊することを防ぐことが出来るためだと思われる。また社会福祉士、柔道整体師、看護師などの他職種連携により一人一人の健康状態を確認することが出来るなど手厚いサポートも受けることが出来る。何かあれば即対応することも可能なので、この面で安全は保証されていると言えるだろう。

今後 2025、2040 年問題に向けて、ますます高齢社会に向けて施設のあり方が問われていくのではないかと思われる。その中で、利用者にとっての暮らしの自由と安全が保証されることは、心身ともに安心して暮らすことが出来るために必要なことであるだろう。もし将来、自分が施設を利用する立場になったとき、どのようなケアだったら安心して任せられ、その施設で暮らすことが出来るかということも考えることが出来た研修だった。

最後に、お世話になった施設の方々、私たち大学生に優しく接して下さった利用者の方々、そして共に協力しながら企画について試行錯誤した手話サークルのメンバーに感謝の心を申し上げたい。この国内研修が今後の学習に生かせるように、これからもしっかりと勉学に励んでいこうと思う。